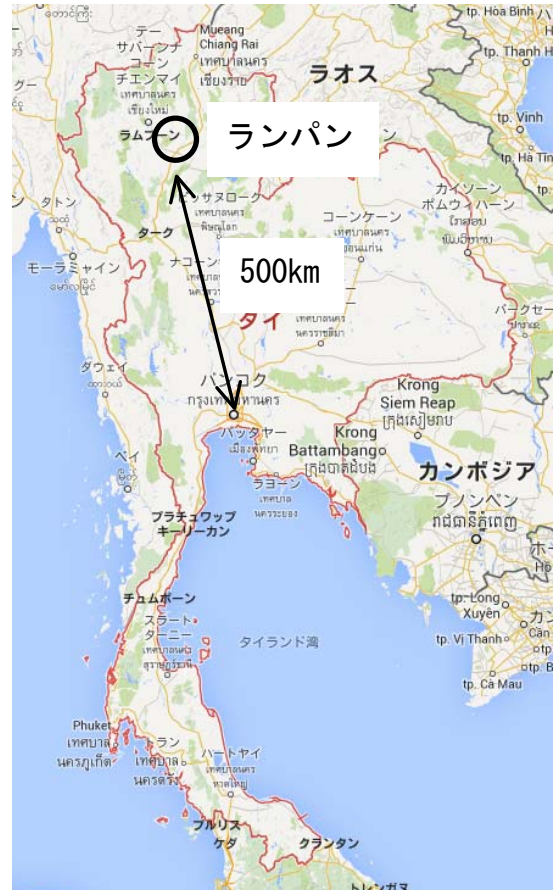


すたれゆく伝統農業「牛耕」をタイで記録し、自然保護活動を次世代につなぐ
コード番号 13-A-030 ガリレオクラブインターナショナル

00 活動の目的

当団体の代表は、30 年以上前からタイ王国との縁があり、2006 年にはランパン県で、子ども図書館を設立・運営しています。ランパン県は、首都バンコクから北へ約 500km、チェンマイから約 100km 南に位置し、のどかな田園・畑が広がる田舎街でした。しかし、10 年ほど前から、急速に近代化が進み、ランパン県の中心部には、いわゆるコンビニや小型スーパーもできてきました。

2011 年に庭野平和賞を受賞されたタイの民主活動家スラック・シワラック師と、当団体とは 20 年来の交流があります。師は、著書「しあわせの開発学」の中でお金目当ての「開発（かいはつ）」ではなく仏教的見地の「開発（かいほつ）」が大切だ、と述べています。



確かに、コンビニやスーパーでは、なんでも揃い、便利です。しかし、その一方で、「開発（かいはつ）」という美名の下、「文化破壊」や「自然破壊」が進み、その結果、自然に対する畏敬の念を忘れ、自然と共存することを放棄してしまったかのようです。そこで、これからは、「開発（かいほつ）」つまり、地域住民による草の根からの社会変革が必要だと、感じています。

「自然と人が共存する社会」を築くには、どうしたらよいのでしょうか。人は自然なくして、生きていくことはできません。そして、未来を担う子どもたちに、「人間が自然より偉いのではない」ということを伝えることが必要だと思います。そこで、私たちは、タイの伝統農業である「牛耕」を守り、次世代を担う世界の子どもたちに伝えていきたいと考えました。自然と共存して生きていくことの素晴らしさを、最も身近な自然である「農業」を通じて感じてもらうことで、持続的な社会が築いていかれ、そして、それが次の平和構築につながっていくと思います。

研究活動の内容と方法

タイにおける牛耕文化について記録し、次世代に伝えるため、次の活動を行いました。また、活動の内容については次項をご参照ください。

1. 日本での事前準備・調査

日程：2013年8月1日（木）～2014年4月2日（水）

2. タイ王国調査

日程：2014年4月3日（木）～5月13日（火）

※ 牛耕は、地域や天候に左右されるため、本プロジェクトに関連するのは、
4月3日～4月12日 5月9日～13日（全15日）となっています。

調査地：ランパン県・カラシン県・スパンブリー県

3. 報告会開催

日程：大阪 6月7日（土）

7月5日(土)

神戸 6月8日(日)

7月6日(日)

活動内容

1. 日本での事前準備

チェンマイ県のいなかでサンファン・サンティパーブ孤児院を運営する山本敏幸氏と、また在タイ 50 年を超えるバンコクの和氣氏に連絡を取りました。つまり、牛耕が行われている可能性の高い北部チェンマイ地域を山本氏に、それでもダメな場合に備えて、和氣氏には、タイの農務省への問い合わせをお願いしました。何度も手紙や電話、FAX で連絡を取り、牛耕を行っている方を探してもらいました。しかし、この段階で、牛耕の衰退が想像以上に進んでいることが分かりました。まず、これまで、



まさに2, 3年前まで、牛耕を実施していた農家の人たちが、今は牛耕から、機械（耕運機）による農業へと移行してしまっていました。中には、後を継ぐ人がいないため、農業を辞めてしまった方もたくさんいらっしゃいました。

タイの農務省や、大学に問い合わせをしていただいた和気氏からは、実際担当者に会って、「牛耕」という単語を出すたびに、若い担当者や研究者は、すでにその単語すら知らないというびっくりするような事実の報告がありました。ちなみに、和気氏と何十年も前に、バンコクでアメリカ映画を見に行ったことがあるのですが、英語には、多少不自由な、氏ですが、なんとタイ語の字幕を読んで、映画を100%理解されているのには、驚かされました。つまり、現地の人と、全く遜色がないほどに、タイ語の能力をお持ちでいらっしゃいます。よって、「クワイタイナー」という言葉が、通じなかったのではなく、本当に、それが、「牛耕」を意味することを、農業を専門にする人すら知らなくなっているという現状がすでにあるのです。このことは、日本では、もっと、如実に、ほとんどの若い人には、「牛耕」という言葉は、全く「お経」か「般若心経」の一節または、ただの変な音としてしか理解されません。

ところで、話を戻すと、牛耕の時期についても、4月、5月にしていた、という人もいれば、8月にしていた、11月にしていた、という人もいて、情報が激しく錯綜していました。そこで、今回は4月～5月に集約し、渡タイし、現地で足を使って調査することにしました。

2. タイ王国調査

● 北部 ランパン県

ランパン県に到着後、すぐに情報収集に取り掛かりましたが、ランパン県では、牛耕を見るのが難しい、ということがわかりました。数年前まで牛耕を行っていた農家の方に、やり方を見せてほしい、というお話をしたところ、水牛はいるけれど、犁（すき）を始め、道具は、木材と鉄でできており、使っていなかったため、木が腐ったり、さび付いたり、朽ちてしまっており、既に使えなくなってしまった、ということで、見ることはできませんでした。そこで、どこでなら今でもやっているか、お話を聞いたところ、タイの米どころである東北部では、今でも牛耕が行われていると思う、という話を聞き、まずは、タイ東北部カラシン県のクチナライウィメンズアソシエーションという団体を紹介していただきました。お百姓の奥さんたちが集まって、フェアートレードの織物を高床式の家の一階部分の地べたに機（はた）を置き、織物をされているプラビーナさんの家に向かうことにしました。

● 東北部 カラシン県

カラシン県は、バンコクから約 500km 東北に位置し、絹織物でも有名な街です。まず、カラシン県のクチナライウィメンズアソシエーションを訪ねました。農家のお母さんたちが、現金収入につなげるため、副業できれいな布のコットン織物を織っています。そこに集まるお母さんたちに情報収集のため聞いていただきました。すると、タイ有数の米どころである東北部でも、現在は、彼らが、「KUBOTA」という（メーカーは久保田とは限らない）名称で語られる管理機や、トラクターで機械化されており、牛耕はしていませんでした。そんな中ですが、前年まで牛耕を行っていた、チャイアンさんという農家の方にお会いすることができました。そこで、ぜひ、牛耕を記録したいというお話をすると、通常は、雨が降り、土壌がぬかるんでからするので、この辺りでは 6 月～8 月の間に行うが、どのように器具を扱い、牛耕を行うのかを見せていただけることになりました。

この時の様子は、10 ページ以降で、写真にまとめてあります。

なぜ、牛耕には水牛が使われるのか？と言うと、ムクダハン大学の農学部のトーチャン教授によると、実は、「牛は暑がり、すぐばてるので、牛耕にむかないが、水牛は、暑いのが好きなので、だからタイでの牛耕には水牛が使われる」そうです。

なぜ、牛耕がすたれ、機械化に走ったのか、と聞くと、2 つの理由をお話いただきました。一つは、昔に比べ、水牛の購入費が高騰していること。もう一つは、機械の方が水牛に比べれば、5 倍以上早く仕事ができる、ということでした。コストと生産性が合うためには、機械を使った方がよいということになり、国の補助金などを利用して、耕運機を購入するのに拍車がかかったそうです。

「でもね、水牛は牛耕の後、川へ連れて行って、落日を背景に洗ってあげたり、いい景色だったのに、それに引き替え、機械は、便利だけど、高いし、燃料も食べるからもっと高くつくでしょ。水牛だったら、雑草を食べてくれ、除草の役に立ち、それで大きくなったら食べられるし・・・」

また、10 年近く機械を使っている農家の方は、数年前に燃料価格が高騰したため、その年は、牛耕をしようと思ったけれど、水牛につける鋤（すき）がなく、手に入らず、結局機械を動かさざるを得なかったのも、燃料を買うのに費用がかさんでしまった、というお話をされていました。

ここで、気になった、または、気に入らなかったのは、以前、タイのお百姓の心意気を聞いたことがあるからです。それは、25 年ぐらい前の鹿児島の「からいも交流」での出来事です。

鹿児島のお百姓が、それまで、研修で来ていただいていたタイのお百姓のことを知ろうと、タイの田舎へと交流に出かけるのですが、最新式の器械では、メンテナンスも大変だろうからと、わざわざ日本では使わなくなった、納屋で眠っている、足踏み式の脱穀機を引っ張り出して、お土産に持参したそうです。タイのお百姓さんたちは、今まで、道路に稲穂を撒いて、脱穀していたレベルなので、初めこそ、その能率の良さに驚嘆していたそうですが、1 週間の滞在の最後には、誰も使わなくなり、その挙句に、日本でもそうであったように、納屋にしまわれてしまったそうです。

いぶかしく思った、鹿児島のお百姓さんたちは「なぜ、あれほど喜んでいたのに、使わなくなってしまったのか？」と聞くと、タイのお百姓は、「あれは便利だけれど、おれたちは、仕事歌を歌いながら、楽しく仕事をしてきた。なのに、あれがあると、せわしくて歌を歌える余裕がなくなった。おれたちは、能率が上がるより、今まで通り、歌を歌いながら仕事がしたい。」

残念ながら、20 有余年の月日を経て、お百姓の心意気は、御多分に漏れず、便利、現金至上主義のそろばん（現在では、明らかに電卓と言うべきなのでしょうが・・・）の前には、木端微塵となるのだと、言わざるを得ません。

この流れに反し、やはり探せば変人がいるもので、このまま水牛の文化や牛耕文化が廃れてしまうのを危惧して、スパンブリー県に水牛村を作り、文化の保全をしている、というところがあるという情報を入づてに得ました。この旅の後半では、その牛耕村を訪れることにしました。ただし、現地のコーディネーターにも、ネットや調べてもらっても、ホームページがあるわけではなく、また、昔のパンフレットを FAX で手に入れたのですが、そこに書いてある電話に、いくら電話してもらっても、一度も、誰も、何時でも答えてもらえませんでした。よって、もうなくなっているかもしれないけれど、ここは、行くだけ行ってみようと決断しました。

（このあと、4 月 13 日から 5 月 8 日までは、自費にてラオス、ベトナム、カンボジアの「牛耕」調査に出かけ、いそしみ、タイでの後半の調査を 5 月 9 日より始めました。）

● 中部 スパンブリー県

スパンブリー県は、バンコクから 100km 北西に位置し、3500 年前からある伝統あふれる地域です。ここに、もしくは、こういう村だからこそ水牛村があり、牛耕を始め、水牛の文化や、昔のタイ人の生活を垣間見ることができます。事前の情報では、入場料は大人 150 バーツ（約 450 円）ということでしたが、実際、入り口では、30 バーツ（約 150 円）と言われ、残念ながら、安くしないと人が来ないんだらうなあと心配になりました。

今回、水牛村を訪問した際、長く雨が降らないという異常気象の為、残念ながらリアルな牛耕を見ることはできませんでしたが、タイの人々も、牛耕文化が廃れてしまうことを危惧していることがわかりました。また、カラシンでは、水牛が荒くて、怖くて、触ることさえかなわなかったのですが、こちらでは、初めて、水牛にも触れられ、更に、水牛に乗せてもらえることができました。水牛の肌は、まず、短毛で、とても、雰囲気としては、ぴちゃぴちゃしています。もちろん濡れているわけではないのですが、何か、こちらの手が、吸い付くような感じで、決して、サメ肌ではありません。

余談になりますが、4, 5 月がタイでは、一番暑い季節です。水牛村にお伺いした日は、なんと外気は 40 度近い、本当に暑い日でした。ほかの交通手段がなく、タクシーで行くのですが、どうもいつまでたっても、エアコンが効いてこない。結局、2 時間ぐらいして、ここですよと言われ、現地に着いた瞬間、車から転げ落ちるように下車し、そのまま 30 分 木陰で休ませてもらいました。どうも、エアコンが壊れていたようで、水牛なら平気なのでしょうが、私たち日本人には、暑くてもうふらふら、熱中症状態でした。

ところで、タイでは、稲作の季節の始まりに作物の豊作を願って、「始耕祭」が行われます（2014 年は 5 月 9 日）。テレビや新聞でも国王が手植えで田植えをされる様子が放映されます。式典では、牛耕も行われます。この儀式は、2500 年以上前から続いており、いかにタイで牛耕が日常的に行われていたのかがうかがえます。

水牛村のスタッフの方の実家が、故郷のシーサケット県で農業をされており、実際に牛耕栽培を行っていることを聞きました。季節は、7 月～8 月頃行うので、来年は、ぜひ実践させていただきたい、と考えています。

3. 報告会の開催

各種国際交流団体、NGO、NPO 等々を始め、新聞、SNS 等も駆使して、情宣に励んだのですが、あまり興味を持っていただける分野でなかったのでしょうか、思いのほか集まりはよくなかったようです。しかし、それゆえお集まりいただいた方の熱は、通常以上のものがあり、報告会終了後も、延々と語り場が続いたことは、とても喜ばしかったです。

報告会では、タイ国についてということで、タイ人神戸大学留学生のベン君にも講師として参加していただきました。

前半は、スライドショーをご覧いただきながら、プロジェクト全体の報告と、タイにおける牛耕文化の今と未来についてお話しました。後半には、参加者の理解を深めるために、質疑応答も行いました。

大阪

日時：6月7日（土）18:30～21:00 27人

7月5日（土）18:30～21:00 18人

神戸

日時：6月8日（日）14:00～16:00 12人

7月6日（日）14:00～16:00 15人

合計：72名の参加者

報告会 参加者の感想

・最初は、収量が増えるわけでもなく、手間が減るわけでもないのに、なぜ「牛耕」なのか、わからなかった。しかし、話を聞くにつれて、「便利」とか「スピード」以外の物差しがあり、その大切さが伝わってきた。

・牛にもさまざまな種類がいて、なぜ牛ではなく水牛なのか、といったお話も面白かったです。

昔は日本でも牛耕がありましたが、今は見ることもできないので、懐かしい思いで聞きました。

・日本の食料自給率は40%を切りましたが、実はタイでも若者の農業離れが進んでいるという話を聞き、驚きました。子どものころから、農業に対する誇りを持つことで、農業離れの歯止めをかけることができるのでは、と思いました。

・牛耕がこの十年で急速に減ってしまったことを聞き、とても驚きました。文化は一度廃れてしまうと、復活することが難しいと思います。現に、牛耕の器

具が使えない状態になっているそうで、このプロジェクトの必要性がわかりました。

・機械は、燃料が必要なので、ランニングコストも高いのでは、と思いました。水牛は、ランニングコストもあまりかからず、最後に、食料として、売ることができるので、ランニングコストが少なくて済むと思いました。実際に、数年前は燃料価格が高騰して、農家の方が非常に困ったということを聞き、自然の力でする大切さがわかりました。

・私も水牛に乗ってみたいです。(8才の女の子)

活動の実施経過

1. 日本での事前打合せ (8月～3月)
2. タイ国での活動 牛耕体験 (4月～5月)
3. 報告会 活動を広く一般の方に知っていただく (6月～7月)

活動の成果

当初は、子どもたちと一緒に牛耕を行う予定でしたが、牛耕の荒廃のスピードは、予想をはるかに超えており、よほどの田舎に行かない限り行われていません。その意味で、今回は、子どもたちと一緒に行うことができませんでした。タイ全体の牛耕文化の現状について知ることができました。

また、一度牛耕を辞めてしまうと、器具の手入れなどをしなくなるため、もう一度、牛耕を行うのがとても難しいことがわかりました。だからこそ、今残っている牛耕を残していく必要があり、本事業の意義がはっきりとわかりました。

今後の課題

前述の通り、今回の事業で、私たちが想像している以上に、牛耕文化が急速に廃れていることを実感しました。日本にもかつて牛耕文化がありましたが、近代化の流れの中で完全に廃れてしまいました。

効率や収量を追い求めるならば、確かに牛耕は機械にかないません。しかし、なぜ、私たちが牛耕にこだわるのか、というと、「自然への畏敬の念」や「自然と人が共存する社会」がそこにはあるからです。

人間だけが「主（あるじ）」ではなく、あくまでも、人間は自然の一部で、他の自然と共存する道を探るべき、と考えます。

機械は「人間が自然を支配する」という発想ですが、この思想はやがて、自然破壊やそのおごりのせいで、ひいては戦争へとつながるのではないのでしょうか？決して共生や平和構築にはつながらないように思えるのです。

また、バンコクに住む人々と話をする機会がありましたが、ほとんどの人が、牛耕について何も知らないという状況でした。これは、タイの人々の農業離れ、実際に農業をしていない、ということはもとより、農業に関心がない、ということも裏付ける出来事だと思います。

現在日本ではたった、2%にも満たない農業従事者が1億3千万人の食糧供給をしているのです。そして、そのうちの四分の一がすでに、65歳以上の方たちです。2030年を考えると、65歳以上の人たちが半分近くです。はたして、80歳の老人が、鍬や鋤をふるって、バリバリ農業にいそしんでいるのでしょうか？

食糧供給という意味で、日本の未来はあるのでしょうか？

神戸大学農学部名誉教授の保田茂氏は、2030年には、食料供給ができなくて、日本は、崩壊してしまうと、警鐘を鳴らし続けています。なぜなら、この年、世界人口が80億に達し、この数字は、地球が養える最大の数字だからです。つまり日本の飢餓は、世界の飢餓に連携するのです。

飢餓は、ある日突然やってくるものではありません。今も少しずつ、忍び寄ってきているのです。昨年末、いつもなら、100円でも売っていた白菜は1200円を超える値をつけ、それにも増して、年々エスカレートする異常気象も追い打ちをかけています。

輸入すればいいと簡単に言う人もいますが、輸入するには、お金が必要です。統計的には、日本はすでに10年以上ゼロサムか実質マイナスの経済成長で、国の借金も1000兆を超え、お金には、あまり期待が持てません。というより、自国の民が飢え始めるとき、食料の輸出をする国があるのでしょうか？

悲観的な話で終わりたいのではなく、今日を覚ませば、まだ、間に合うというお話です。牛耕はあくまでも、次の世代を始めとする、日ごろ農業に無関心な人々に、目を向けていただく、意識を持っていただくための手段です。牛耕が廃れてしまうことと、農業が廃れることは、もちろん別のことですが、牛耕文化を大切にできれば、農業が廃れることもないのではと考えています。



最初、博物館に連れて行かれたのですが、器具は保存してあるのですが、水牛がないので、体型を鑑み、水牛をやらされました。



耕作に使用する鉄製の鋤（すき）今は、これがなかなか手に入らない



最初アフガンの人かと思ったほど・・・タイ人のチャイアン父さん



チャイアンさんのご家族



牛耕の原風景 犬も一緒に



「あ～疲れた。でも、楽しかった」とでも言っているような目がかわいい



角の長さで年齢がわかります。3歳ぐらいの若い水牛
かわいく見えますが、動きは意外に俊敏で、なかなか近寄りにくい



川べりの野良水牛 田舎では、いたるところに牛も水牛も 時々ヤクも見る



スパンブリの水牛村 「も～こそ、水牛村へ」とは聞こえなかったが
なんせ、熱中症の真っただ中、よけいに暑苦しい、感じ・・・



牛もふらふら 重すぎて 僕もふらふら 暑すぎて